「響け！　復興輪太鼓　雄勝中の３８７日」を手にして

書籍「たくましく生きよ。～響け！復興輪太鼓　石巻・雄勝中の３８７日～」を読み終えた。

雄勝中学校の和太鼓は津波で全て失い、古タイヤにビニールテープを貼って麺棒で太鼓代わりに叩くことから「和」でなく「輪」とした「復興輪太鼓」の活動の様子は、誰もが報道で一度は目にしていると思う。

別用で街に行った折、時間つぶしに書店内であれこれ本を立ち読みし回っていた時に、書名にある「雄勝」と「復興輪太鼓」の文字に目が引き寄せられた。
というのも、先の記事「まだまだ長い道のりだけに、一歩一歩、ゆっくりと…（HP「雑学 BN」のメル友・コメント等関係（Ⅵ）、2012.03.11.：参照）」で触れたメル友は雄勝の方であり、お子さんが「復興輪太鼓」の活動をしてることはメールで時々触れられていた。

本をぱらぱらとめくったら、卒業式での校長の挨拶文の中に、お子さんの名前も見つけたので即購入した。
購入したその日の夜に、メル友に「写真も結構載っているので、お子さんが写っているかなと探すのを楽しみに、これから読みます。」とメールしたところ、早速次のような返信（抜粋）をいただいた。

「校長先生の本購入ありがとうございます。印税は、すべて学校の基金に回されると言う事です。
先日、出版を祝う会が仙台であり、主人と一緒に参加しました。
震災後は、子供たちを本当に学校へ任せっぱなし出来たらからこそ、これまで復興できたと思います。
正直、学校がこれだけ支援を受けているのに、何がどうなっているか？どうして雄勝中は他より支援が凄いのか？卒業まじかになって、何故だ～と思っても何もわかりませんでした。
校長先生の本のお陰で解りました。組織はトップで本当に変わりますよね～」

確かに、雄勝中の校舎は津波で瓦礫となったが、校長の「たくましく生きよ。」を新たな校訓とし「生徒たちのために、何でもやろう」とのリーダーシップの元、教師が一団となって他校の間借り教室でどこよりも早い４月２１日に学校を再開した。
生徒一人一人に自信と、支援下さった方々への感謝を伝える表現として全生徒の参加による「復興輪太鼓」活動を始めたこと、等々、学校という場所や建物があってこそ教育が出来るということでなく、「教師と子どもが係わり合う教育活動が行われている事象こそが学校そのもの」ということの実践例かなと思いつつ読み終えた。

阿部幸泰　　（2012 年 6 月 15 日　記）